

# 美浦村生涯学習推進計画

— 美浦ライネル・プラン (2012 ~ 2021) —

平成24年4月



 美浦村

美浦村教育委員会

## 美浦村生涯学習推進計画の策定に当たって



美浦村の生涯学習推進計画を新しく作りかえる作業に取り掛かろうとしていた矢先の平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災がありました。1000 年に 1 度という大規模な地震と、それに伴う津波によって受けた災害は甚大なものでした。それに加え、福島第 1 原発が破壊されて爆発事故を起こし、かなりの量の放射線が漏れ、地元住民の多くが他市町村への移住を強いられることになりました。

このような事態は、私たちに改めて、家族のみならず同じ地域に住む人同士がよき人間関係を築き互いに支え合い助け合うことがいかに大事であるかに気づかせてくれました。そして、そのような地域になるかどうかは地域の住民がいかにわが故郷（ふるさと）を愛し、愛するがゆえにどれだけ地域のために力を尽くそうとするかにかかっているということでした。

国の財政の逼迫度が増してきている今日、政府は地域主権の方向に向け法の整備を進めています。地域主権とは、要するに、どの自治体も自治体の責任で意志決定をし運営するという事です。そうであるからには必要な財源も自治体の責任で確保し賄うということになります。

このような時代に美浦村が住民の生活や福祉の水準を下げることなく、村の活力を維持し安心安全な暮らしを保持していくためには、住民一人ひとりが自らの能力を高め、それぞれの力を発揮し、行政と協働して村づくりに尽力して頂くほかありません。そのために取り分け住民に求められる能力は「人が人とつながり社会を作る力」すなわち「社会力」です。

本村の生涯学習が新しい推進計画にもとづき着実に実行され、村民の資質向上と社会力の育成と強化に資することを念じております。

終わりに、この計画の策定に当たり、熱心にご審議を賜りました生涯学習推進計画策定委員会の委員各位と、事務局として取りまとめに当たった教育長はじめ生涯学習課の皆さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

平成 24 年 3 月

美浦村長 中 島 栄

## 目 次

はじめに	1
－生涯学習推進計画策定に当たっての基本的な考え方－	
1. わが国における生涯学習の歩み	2
－わが国は生涯学習社会の実現に向けどのように歩んできたか－	
2. 生涯学習の定義とその必要性	3
－なぜ、今、美浦村で、生涯学習の刷新と推進が求められるのか－	
3. 美浦村における生涯学習のこれまで	5
－美浦村では、生涯学習を、これまでどのように進めてきたか－	
4. 美浦村で行うこれからの生涯学習の基本方針	7
－美浦村ではこれから何を実現すべく生涯学習を進めていくか－	
5. 学習の基本的な考え方と生涯学習で実現する目標	9
－これからの「学習」についてどのように考えたらいいか、 また、美浦村で行う生涯学習でどのような目標を実現するか－	
6. 生涯学習施設の利用条件の整備と積極的な活用	12
－生涯学習に活用する諸施設の利用条件をどのように改めたら、 学習者の増加と学習頻度と満足度を高めることができるか－	
7. 生涯学習計画推進体制の刷新と積極的推進に向けて	13
－生涯学習計画を推進するために、どのような学習体制を 整えなければならないか－	
8. 生涯学習計画推進の実施期間と具体的内容	16
9. 美浦村の生涯学習推進計画の愛称	18
－なぜ、美浦村の生涯学習推進計画を「美浦ライネル・プラン」 と呼ぶことにするか－	
おわりに	19
－美浦村の生涯学習をよりよく発展していくために－	
策定委員名簿	20
関連資料および参考文献リストーさらなる学習のために－	20

はじめに

－生涯学習推進計画策定に当たっての基本的な考え方－

美浦村において、これから、村民の生涯学習をどのように進めていくか。そのための基本計画を策定するに当たって次のことを基本とすることにしました。

- 1) 誰が読んでも分かるような内容と平易な文章にすること。
- 2) できるだけ美浦村の生涯学習としての特色を出すこと。
- 3) 計画の内容をできるだけ具体的に示すこと。
- 4) 計画を策定すること自体を目的にするのではなく、実行性のある現実味のある計画にすること。
- 5) 計画をまとめた冊子は20ページ程度にすること。

官庁や自治体で作る計画書の類には、計画書がやたらに厚いだけで、分厚い計画書を作ることを目的にしたようなものが少なくありません。こういう計画書を作っても、そこに書かれていることを実際に実行し実現しなかったら何のために計画作りをしたのか分からず、時間と労力の無駄というものです。美浦村の計画書はそうしたものにしないこと、それが計画作りには当たって基本とした第一のことです。

また、今日では、ほとんどの市町村が生涯学習計画を立てていますが、その内容を見ると、その市、その町、その村に特有の内容になっておらず、どこの市町村の計画としても通用するような特色のないものが少なくありません。美浦村では、このような特色のない計画にはせず、美浦村だからこそやる必要がある内容だとか、美浦村の問題や課題に応えるような学習にするとか、「0歳から90歳までの社会力育て」を実現目標に掲げた「新しい教育プラン」に即した内容にするとか、美浦村固有の計画を策定することを基本とすることにしました。

そして、文章もできるだけ分かりやすい言葉を使い、誰でも読めばすぐに理解できるような、そして手頃な分量にして広く読んでもらえるような計画書にすることにしました。また、当然のことですが、計画の内容もすぐにでも実行できるものにし、できるだけ具体的に書くことにしました。

村民の多くがこの推進計画を手にして読んで下さり、目的と目標とするところを理解され、一人でも多くの方が生涯学習の仲間に入り、学習の成果を活かして美浦村の発展に貢献して下さることを願うものです。

## 1. わが国における生涯学習の歩み

—わが国は生涯学習社会の実現に向けどのように歩んできたか—

生涯学習 (lifelong learning) とは、平たくいえば、学校を卒業し、社会に出て仕事をするようになって、また、仕事をする年齢を過ぎて、熟年生活をするようになってからも自分の意思で学び続けること、といえます。このように言うと、社会が豊かになったおかげで、ゆとりのある優雅な生き方ができるようになったから生涯学習を広げ充実させていく必要があったのだと考えがちです。そういう面も確かにありますが、ご承知の通り、現代社会は年々変化してきていますし、変化のスピードも速くなっています。そうした社会でよりよく生きるためには、誰もが常に何らかの勉強を続けなければならなくなっているのも事実です。

そのような社会になったことを踏まえて、ポール・ラングランという人が、1965年にユネスコの会議の中で、現代人は生きていく間ずっと教育を受けなければならない時代になったと主張し、「生涯教育」を勧める提案をしました。

それ以後、世界各地で、生涯教育の必要性が唱えられるようになりました。しかし、「教育」という言葉には“勉強させられる”というあまり好ましくないイメージがあります。そこで、“自分の意思で自分のために学ぶ”という側面を強調するには「生涯学習」という言い方が好ましいという人が多くなり、次第に生涯学習という言葉が使われるようになり今日に至っています。

わが国で生涯学習の必要性が言われるようになったのは、ほぼ 30 年ほど前の 1980 年代に入ってからですが、その先駆けをなしたのが 1981 年に中央教育審議会が出した答申でした。その後、臨時教育審議会や生涯学習審議会などの答申が続き、教育の体系を生涯学習体系に移行することにし、1988 年には文部省の社会教育局が生涯学習局に変えられることになりました。そして、1990 年に生涯学習振興法が作られ、2001 年に省庁の再編に伴い文部省は文部科学省になり、生涯学習局は生涯学習政策局になり、わが国においても生涯学習が普通のことになり、生涯学習社会を実現すべく全国いたるところで生涯学習を充実させる施策が進められることになりました。

わが国の生涯学習の歩みのポイントを大雑把に整理すれば上のようになります。

## 2. 生涯学習の定義とその必要性

—なぜ、今、美浦村で、生涯学習の刷新と推進が求められるのか—

わが国では、生涯学習とは、文部科学省が定義するところによれば、「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択し学習すること」とされています。これを、やや詳しくわかりやすく説明すれば、学校に入学する前の幼児から後期高齢期に属する熟年者まで、すべての国民が、小学校や中学校、高校や大学などの教育機関に席を置いているかどうかに関わりなく、生涯のすべての段階において、自分の意志にもとづき、好きな時に、好きなことを、好きなところで、好きなやり方で自由に学習すること、といえます。

では、なぜ、近年、このように、すべての国民が生涯にわたって学習することが大事なことであるとされるようになったのか。普通、一般的に言われているのは次のようなことです。

- ① 技術が急速に進歩し、社会が大きく変化してきているため、社会の変化につれて、学校を卒業してからも、パソコン技術や外国語の勉強など、新しく学ばなければならぬことが多くなったこと。
- ② 平均寿命が延びて長寿社会になったため、定年で仕事を辞めてからの人生が20年、30年と長くなり、この期間を、有効に、しかも生きがいをもって過ごすためには学習するのが一番いいという考えが広がってきたこと。
- ③ 生活水準が高まるにつれ、人々の価値観が多様になり、一人ひとりが豊かな人生を送るためには、画一的なお仕着せの学習ではなく、自分の価値観に合った学習を望む人々が増えてきたこと、などです。

このような理由は、もちろん、美浦村にも当てはまることですが、美浦村では、これに加え、あと2つ、次のようなことも見据えて生涯学習を推進していく必要があります。

- ④ まず1つめは、地域のことは地域で決めて、地域で決めたことは地域の責任で行なっていかなければならない地域主権の時代を、夕張市のように財政破綻を来たすようなことにはならず、健全で好ましいかたちで乗り切っていくためには、すべての村民が、学べる時に、学ぶべきことをしっかり学び、学んだことを村の活力を高め、村を活性化させるために積極的に活用することが大事になるからです。

これまでのように、余裕のある時間に、公民館で催される様々な講座に出て余暇や趣味を楽しむという生涯学習に止まらず、村の課題を実現し、村の問題を解決するために学習してもらふ必要が出てきたということです。

- ⑤ あと1つは、新しく作った「美浦村の教育プラン」としっかり連動した生涯学習

にしなければならないということです。新しい教育プランでは「0歳から90歳までの社会力育て」を実現目標にしています。幼稚園や学校での教育だけでなく、主に社会人としての大人の学習である生涯学習においてもまた基本的に社会力が育ち強まっていくような学習にしようということです。村民の多くが社会力豊かな人間になることで、美浦村はこれからますます発展していくことができると考えるからです。

美浦村では、①～③よりも、④と⑤に力点を置いた生涯学習を推進していくことを新しさと独自性にしなければなりません。



### 社会力豊かな村民のイメージ

1. 美浦村に住んでいてよかったと思っている村民
2. 美浦村にはいいところがたくさんあると思っている村民
3. 村に仲よくしている人が多くいる村民
4. 何事であれ、ものごとに前向きな村民
5. 自分やわが我のこと以上に村のことを考える村民
6. 村の住民の一人として、自分にも村の役に立つことができると考えている村民
7. 旧住民であれ新住民であれ、分けへだてなく人づきあいできる村民
8. 村のためになることをあれこれ考えている村民
9. 好奇心が強く何でも学びたいと思っている村民
10. 村の将来に明るい見通しを持っている村民
11. 他の人たちと一緒に何かをやるのが大好きな村民
12. これから生まれてくる子どもたちのために美浦村をよくしたいと考えている村民

### 3. 美浦村における生涯学習のこれまで

ー美浦村では、生涯学習を、これまでどのように進めてきたかー

美浦村では、これまで、社会教育事業の一環として、中央公民館、光と風の公園、文化財センターなどの施設を活用した様々な講座やイベントを中心に、スポーツ・体育施設の活用、図書室の整備と利用、文化財の発掘と保護などを加え、村民の生涯学習の質を高めるべく、多くの事業を行ってきました。これまで行ってきた具体的な事業をあげれば、「みほ文化講座」「美浦大学」「いきいきミセス講座」「ICT 研修会」などの開設であり、「みほ産業文化祭」や「陸平縄文文化まつり」の実施であり、さらには、各種スポーツ大会の開催や陸平貝塚の発掘調査など、多岐にわたる様々な学習事業やイベントを行ってきました。こうした生涯学習に関わる事業や催しを行ってきたのは、生涯学習を推進することが、「人づくり」につながり、ひいては「村づくり」のもとになるという考え方を基本にしてのことでした。

そうした考え方を点検し、生涯学習の今後の在り方を見直すために、平成17年9月に村民2000名を対象にした「生涯学習に関するアンケート調査」を行いました（有効回答者数511名。回答率26%）。

アンケート調査によって明らかになったことはおよそ次のようなことです。

- ① 過去5年間に生涯学習に参加したり、自分で学習をした村民の割合は3分の1（34%）程度で、残り3分の2の村民は、テレビを見たり（64%）、ショッピングをしたり（51%）、家族と過ごしたり（43%）して余暇時間を過ごしている。
- ② 生涯学習に参加した人の参加回数は「4回以下」という人が7割（72%）で、さほど多いとはいえない。
- ③ 行った生涯学習は「趣味を楽しむ」（51%）、「教養講座への出席」（32%）、「スポーツ・レクリエーション」（31%）がほとんどで、「福祉・ボランティア」（24%）や「地域活動」（17%）への参加はまだ2割前後に止まっている。
- ④ 村民が生涯学習を行う目的は、「趣味や生きがい」（27%）、「知識や教養」（18%）、「仲間づくり」（16%）が主で、「地域活動で役立つ」は7%止まりである。
- ⑤ 美浦村で行っている生涯学習に参加していない理由は、「情報が少ない」（22%）、「時間帯が合わない」（21%）、「時間がない」（18%）、「興味がない」（16%）、「仲間がいない」（10%）などが主なものである。
- ⑥ 今後行ったり参加したいとしている生涯学習の内容は、今行っているものとほとんど同じで、「趣味」（23%）、「スポーツ・レクリエーション」（15%）、「知識・教養」（13%）が主である。「福祉・ボランティア」（5%）と「地域活動」（4%）は、現状より大きく後退している。



- ⑦ 今後やりたい学習の仕方では、「村などが行う講座」が最も多く 28%で、次いで「グループ・サークル」(17%)、「民間の講座」(8%)が続く。なお、「具体的にはわからないが何かのきっかけがあればやってみたい」という人が 16%いる。

美浦村での生涯学習のこれまでと、その足跡を踏まえたアンケート調査の結果をおおまかに整理すれば上ようになります。生涯学習をしているという人が 3 人に 1 人というのは、スウェーデンでは国民の 5 割が常に何らかの学習をしているということを考えると、わが美浦村の住民はまだまだ学習が足りないと言わざるをえません。

### 生涯学習社会・スウェーデンの実際

今日では、スウェーデンに住むすべての市民は、人生のいかなる時点においても必要に応じて教育に接近できる。文字通り、生涯学習の国であり、学習社会である。

資料的にやや古いですが、1981 年時点では、実に、国民（7 歳以上の人口約 700 万人）の 4 人に 1 人が学歴につながる学校（正規の教育機関）に通学している。

この数字は、スウェーデンで発達している学習サークルも考慮に入れるともっと膨れ上がり、国民 2 人に 1 人が勉強に精出している社会になっている。これはもう「生涯学習の国」「学習社会」と表現する以外ない。

スウェーデン人の教育・教養に対する関心の強さは、活発な学習サークル活動にも現われている。多くの市民が学習サークルに登録し通学する。現在では、この小さな国に約 30 万の学習コースが設置され、約 250 万人もの市民がそれに参加している。

学習サークルを経営・運営しているのは、日本のカルチャーセンターとは違って、政党（議員）や労働組合、それに各種運動団体である。政党（議員）や組合は学習サークルを通して市民の日常生活に接近し、市民との距離を縮小している。議員にとっても絶好の学習機会となっている。スウェーデンの政治組織が巨大組織を維持できているのは、こうした形で時代の流れを敏感に読み取り、それを基礎に柔軟な政策対応能力を発揮できているからである。

学習サークル活動の運営資金は国庫補助金、参加者の授業料、地域の補助金で賄われている。「カネが教育機会を左右してはならない」という大原則があるので、国庫補助金は簡単に獲得できるようになっている。この国では、何か学びたいと思った時、簡単にその機会を提供してくれる。

岡沢憲夫『スウェーデンは、いま』（早稲田大学出版部、1987 年）から引用。

#### 4. 美浦村で行うこれからの生涯学習の基本方針

—美浦村ではこれから何を実現すべく生涯学習を進めていくか—

では、このような経緯とアンケート調査の結果を踏まえ、美浦村のこれからの生涯学習計画をどう設計していくのが望ましいか。基本的には次のような 2 つのことが考えられます。

- (1) 大幅な変更はせず、現在学習している 3 分 1 ほどの村民に支持されてきたこれまでの学習のやり方と内容を継続する。
- (2) 到来する地方主権の時代を見越し、また、財政事情の好転が見込めない今日状況の中で、より積極的に、生涯学習による「人育て」と「村づくり」を進める方向に力点を置くことにする。

計画の策定に当たって、まず最初に判断を迫られるのは上の 2 つのどちらにするかですが、東北大震災を経験した今の時点で新しい生涯学習推進計画を策定するのであれば、また、美浦村のこれからの一層の発展と村のすべての住民の善き生涯を実現することを第一に考えるなら、前者の (1) を発展的に継続しつつ、後者の (2) に力点を移していくのが妥当であろうと判断しました。

このような方向で美浦村のこれからの生涯学習の基本方針を立てれば、次のような内容にするのが望ましいと考えます。

- (1) これまで行ってきた教養や趣味などに関する講座の量を増やし質を高めること。  
美浦村の地理的条件や交通の便を考えますと、都市部で開催されているカルチャーセンターや、大学が主催する各種の教養講座や公開講座、あるいは、新聞社などが一般人向けに行っている講演会や講習会などに参加したり受講したりするのは極めて困難です。とすれば、中央公民館を活用して行う教養講座や趣味講座などの種類や数を増やし、内容を一層充実させることを行政の責任として行わなければなりません。
- (2) 中央公民館や地区公民館等で行う講座や講習を、村が解決しなければならない問題や実現しなければならない課題と密接に連動させること。

これまでの教養講座や各種の講習会は、どちらかといえば、個人の学習要求を満たすためのものが中心でした。しかし、地域主権の時代が迫ってきている時代状況であることを考えれば、第二次大戦後に公民館がスタートした時点で目指した“地域づくりの拠点”としての公民館本来の役割を回復させることが避けられません。そうであれば、これからの教養講座や各種の講習会などの内容を、美浦村が村として解決しなければならない様々な問題や、村として実現しなければならないいくつかの課題と密接に関連させていく必要があります。

これら 2 つのことに加え、美浦村ではあと 2 つの新しい基本方針を加える必要があると考えます。それは何かと申しますと、2 節でも触れたように、美浦村の新しい教育プランに即した生涯学習を実行することです。それを 3 つ目の基本方針にすれば、次のようになります。

(3) 「0 歳から 90 歳までの社会力育て」を生涯学習を通して実現すること。

社会力とは「人が人をつなぎ社会をつくる力」のことです。分かりやすくいえば、自分が学んで身に付けた知識や技術を、家庭や職場や地域で自発的に活かそうとする意欲や態度のことであり、それを実行できる能力のことです。住民一人ひとりがこのような社会力を高めていくことになれば、アメリカのハーバード大学のパットナム教授が言うところの「社会関係資本 (social capital)」すなわち地域の人的ネットワークが高くなり、結果として、その地域の運営は円滑に行くことになり、ひいては、子どもの成績も良くなり、福祉水準も高まり、地域も活性化し発展していくこととなります。美浦村がそのような社会関係資本の高い地域になることを期待し、これからは、本村の生涯学習をこのような方針にもとづき実行することが欠かせないこととなります。

さらに、補足的ではありますが、あと 1 つ、次のことを 4 つ目の基本方針に付け加え、念を押しておく必要があります。

(4) 子どもと大人が協働して行う体験的な学習機会を増やし、子どもと大人の社会力をともに育てていくこと。

これまでは、子どもたちの学習は子どもたちだけで行い、大人たちの学習は大人たちだけで行うのが当然と考えられ、実際そのように行われてきました。しかし、これからは、大人と子どもが一緒になって学習し、共通の目的を掲げ、協働してその目的の実現に取り組むような体験的学習の機会と場を多くするようにし、子どもの社会力を育てるとともに、大人の社会力を高めていく必要があります。

例えば、現在、小学校 5、6 年生が参加し行っている「ジュニア・アカデミー」の活動にも、できるだけ美浦村の大人たちがかかわるようにするなど、大人と子どもが交流し協働して何かを行うような機会と場を増やすことも積極的に行っていく必要があります。そうすることで、新しい教育プランの中で目標に掲げた「0 歳から 90 歳までの社会力育て」が実現されることになると考えられるからです。



## 5. 学習の基本的な考え方と生涯学習で実現する目標

—これからの「学習」についてどのように考えたらいいか、  
また、美浦村で行う生涯学習でどのような目標を実現するか—

### (1) 学習についての新しい考え方

美浦村でこれから生涯学習を進めていく上で、「学ぶ（学習する）」ということについてどのような考え方をベースにしていくべきか、その基本的な考え方や方向を示すなら、「利己的な学習」ないし個人的な学習から「利他的な学習」ないし社会的な学習に徐々にウエイト（重点）を移していくべきであると考えます。

これまで、わが子に「何のために勉強するの。」と質問された親は少なくないはずで、また、児童や生徒に「勉強なんか嫌いなのに、どうして誰もが勉強をしないといけないのですか。」と質問された先生はかなり多いはずで、その時、親や教師たちがどう答えたかといえば、「勉強していい成績をとればいい学校に行けるでしょう。いい学校を卒業すれば、いい会社に就職できるでしょう。いい会社に就職すれば、お金に不自由しなくてすむし、いい人と結婚できるし、いい人生を送れるでしょう。」というものでした。要するに、「しっかり学び勉強すれば、自分の得（利益）になるから」というもので、言うなら「利己的な学習」の勧めでした。

しかし、最近では、大学を卒業しても就職できないとか、せっかく就職しても会社が倒産してなくなったとか、就職はしたものの社会についての常識がなくて碌な仕事ができないため解雇されたという事例が多くなっています。そんなわけで、利己的な学習の勧めには説得力がなくなっています。

このような社会の変化の中で、とりわけ3月11日の東日本大震災以後に広まってきているのが「利他的な学習」です。どういう学習のことかといえば、勉強するのは、自分のためというより、他の人の役に立ちたいから勉強するのだとか、社会をよくするために何かするにはしっかり勉強しておかないといけないから勉強するという考え方のことです。

これからの社会のことを考えると、環境汚染の問題とか、資源不足や食糧不足や水不足の問題とか、民族間や宗教間の紛争問題とか、私たち人類社会の行く手には難題が次々に立ち現れるのは間違いありません。そんな時代には、自分の利益になるからという理由だけで勉強したり学習したりするというのは間尺に合わなくなっていますし、許されることでもなくなってきました。勉強するのは自分のためではなく、皆のためであり社会をよくするため、というのがこれからの学習の基本になるでしょうし、またそうでなければならなくなるでしょう。これからの美浦村の生涯学習も基本的はこのような考え方と方向にもとづいて行っていく必要があります。

## (2) 生涯学習で実現すべき目標

では、美浦村でこれから、このような考え方にもとづいて生涯学習を実施していくことでどのようなことを実現していくことになるのか。4節で示した4つの基本方針に基づき実現する目標を示せば次の3つになります。

- ① 80年、90年と長くなっている生涯にわたって、村民一人ひとりの人生を豊かで生きがいのあるものにする（村民の生きがい向上と増進）

自分の得になるから勉強したというのでも、社会に役立ちたいから学んだというのでも、学習することで身につけた教養や知識や技術などは、それが多ければ多いほど、結果としては、その人の時間の過ごし方を豊かで有意義なものにします。普段の生活での時間の過ごし方が豊かで有意義なものになれば、そのまま、その人の人生が充実することになりますし、生きがいのある人生になるはずで、村民一人ひとりの人生を豊かで生きがいのあるものにする、このことが生涯学習を充実させることでまず実現しなければならない目標になります。

- ② 学習によって学んだ知識や習得した技能・技術を美浦村の活性化や発展に役立て魅力的な村にする（学習成果を活かした魅力的な村づくり）

どんな動機や理由で学んだことであれ、いつどこで学んだことであれ、一人ひとりが学んだ知識や技術は多岐にわたるものであり、それらを合わせればその知識や技能の総量は相当なものになります。このような多様で大量の知識や技能を村の活性化や村の発展のために活用すること自体もまた生涯学習の目標にしなければなりません。東日本大震災を経験した今、自分たちが住む地域をどう立て直し、将来どのような地域にするかは、結局はそこに住む住民自身が地域にとって「よかれ」と思うことを自分たちの意志と力でやり抜くしかないと感じました。同時に、今、自分たちの地域をどうするかは自分たちで決めて実行することが求められる地域主権の時代が近づいています。村民それぞれが学校で学んだ知識や、仕事を通して身に付けた技能などを地域の活性化と発展に積極的に活用し、美浦村を住みよい将来性のある村にすることを目標にします。

- ③ 大人と子どもの社会力が高まり、誰もが自分から進んで自分ができることを村のために役立てようとする人間になる（自発的な地域貢献意識の向上）

美浦村では平成23年度から「0歳から90歳までの社会力育て」を教育目標の根幹にしました。社会力とは「人が人をつながり社会をつくる力」のことです。平たくいえば、地域の多くの人たちと良い人間関係を築き、互いに助け合いつつ気持ちよく毎日を過ごし、そうしながら、他の人のために、また村のために、自分が何をしたらいいかを常に考えて、誰かのためになるとか、村のためになると思うことを自分から進んでやる意識のことであり、考えたことや思ったことを実際に実行することができる能力のことです。このような社会力を育て強化するためには、大人と子どもが一緒になって

何かをやるという経験や活動を重ねることがもっとも大事なことになります。その意味で、美浦村でのこれからの生涯学習は子どもの社会力を育てると同時に大人の社会力を育てることを明確に目標の一つにしなければなりません。

## 社会関係資本と地域の福祉・学力・犯罪との関係

物的資本は物理的対象を、人的資本は個人の特性を指すものだが、社会関係資本が指しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である。この点において、社会関係資本は「市民的美徳」と呼ばれてきたものと密接に関係している。違いがあるとすれば、市民的美徳が最も強力な力を発揮するのは、その美徳が互酬的な社会関係の密なネットワークに埋め込まれている時だという点にある。裏返せば、個々の市民に市民的美徳が備わっていたとしても、その人たちが互いに何の関係もなく孤立していたとしたら、その地域の社会関係資本が豊かになることはないということである。

人々の日々の生活において最も重要なことは、善意、友情、共感であり、そして、社会を構成する人と人との交流や家族間の交流といったものである。しかし、個々人がひとり取り残されていれば、そのような人たちは社会的には弱く頼りない存在でしかなくなる。しかし、彼が近隣の人々と交流し、近隣どうしが交流することになれば、そこには社会関係資本が蓄積され、それは直ちに人々の社会的必要を満たすことになるし、コミュニティ全体の生活条件を改善するに十分な社会的な力を有することになる。そのような地域では、コミュニティは全体として、コミュニティを構成するすべての人たちの協力によって恩恵を受け、また、同時に個々人も、属する社会の中で、隣人たちの援助、共感、そして友情という利益を被ることになる。

社会関係資本が指し示すのは、社会的なつながりのネットワークである。すなわち「共にすること」である。

子どもの発達には、社会的関係資本によって強力に形作られる。少なくとも50年にわたる膨大な研究の示すところによれば、児童の家庭、学校、友人関係、そしてより大きいコミュニティ内における信頼、ネットワーク、互酬性規範は、広範な影響を児童の機会と選択に、そして行動と発達に与えていることをはっきりと示している。

社会関係資本において高得点を取っている州、すなわち、住民が他の人々を信頼し、組織に参加し、ボランティアをし、投票に行き、友人と交流しているような州は、また、子どもたちも元気な州である。そこでは、赤ちゃんは健康に生まれ、十代の子が親になったり、学校を中退したり、凶悪な犯罪を犯したり、自殺や他殺で若くして死んだりはしない。統計学上、社会関係資本と子どもの発達との間にみられる正の相関はほぼ完璧に近い。ノースダコタ、バーモント、ミネソタ、ネブラスカ、アイオワのような州は、健全な成人市民と健全に社会に適応した子どもに恵まれている。ロバート・パットナム（柴内康文訳『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』（柏書房、2006年）より引用。

## 6. 生涯学習施設の利用条件の整備と積極的な活用

－生涯学習に活用する諸施設の利用条件をどのよう改めたら、学習者の増加と学習頻度と満足度を高めることができるか－

生涯学習をより充実させ村民の学習満足度を高めるためには学習施設のハード面を整備すると同時に、利用するためのソフト（利用条件や利用規則）の見直しや改善を図ることが重要になります。

施設のハード面となると、美浦村にはまだない村民体育館や村民図書館や陸平博物館や美浦ボランティアセンターや市民活動センターや青少年センターや学習センターなどの建設がすぐに思いつきます。しかし、村の現在の財政事情を考えた時、近い将来実現する可能性は極めて乏しいものです。

学習施設そのものを新しく建設し増やすことが難しいとなれば、いまある諸施設をいかに有効に利活用するか、また現在使用上の制限や条件があつてほとんど利用されていない、地区公民館や農村集落センター、田園都市センターや生活改善センター、コミュニティセンターなど、村内にある多くの公民館類似施設をいかにうまく利活用できるようにするかが重要になります。そのために、当面早急になすべきことは、施設を利用する条件や制約を見直し、利用者の資格や利用の目的や利用時間の制限などに関する規則等を改め変更し、より多くの村民の多様な学習目的や学習要求を実現させることです。

また、それと同時に考え整備しなければならないのは、そうした施設を活用した新たな学習機会を作り学習活動を企画運営する人材の掘り起こし（見つけ出し）であり、育成であり、そのような人材の企画する学習活動と運営を行政として支援する方法と運営資金の援助です。

美浦村の生涯学習を充実させるためには、当面、このような施策を進めることも極めて重要であり必要なことです。また、公民館類似施設を活用した学習では平成20年から始めた出前講座を積極的に活かすことも重要になります。



## 7. 生涯学習計画推進体制の刷新と積極的推進に向けて

―生涯学習計画を推進するために、どのような学習体制を整えなければならぬか―

学習施設の利用条件の見直しと規則等の変更と併せ、学習推進体制を作り整えることも必要になります。では、どのような体制を整えたらいいか。最低限、次の6つのことを整え推進していく必要があります。

### (1) 村民一人ひとりの学習欲求の高進

学習体制を整えるためにまず必要なことは、村民の誰もが生涯学び続けたいという欲求を高めることです。そのためにもっとも効果的なことは、「村の発展のためにはあなたの力が必要です。あなたがその気になって下されば、活躍の場はいろいろあります。しかし、そのためにはいろいろ勉強してもらうことがあります。しかし、無理することはありません。自分のペースで好きなように勉強してもらって構いません。何より学び続けることが大事なのです。ですから、どうぞ、続けて下さい。」といった趣旨のことを分かってもらうことです。

人間は、本来、利他的な存在です。誰かのために役に立って、そのことで誰かに喜ばれ、感謝され、頼りにされることが何よりの嬉しいことであり、生きがいになる生き物です。そのような働きかけをすることが、高齢化する社会での生涯学習を推進していく上でますます大事なことになるはずで

### (2) 村民同士の協働体制の構築

これからの生涯学習でますます大事になるのは、村民同士がお互いに「教え合い、学び合う」という関係を作り上げることです。これまでの学習は、公民館が企画した学習講座に参加し、専門家に教えてもらうという形が中心でした。東京とか、つくばとか、専門家が多くいる地域であれば、そのような学習の機会を多く作ることができますし、有料であれ無料であれ、実際にそういう学習の場にこと欠くことはありません。しかし、美浦村のように、都市部から離れ、交通の便もよくない地域では、そういうわけにはいきません。となれば、近くに住んでいる人たちが、お互いに教え合い学び合うことを考え実現しなければなりません。美浦村では、これからは、何としても、このような考え方にもとづいた学習機会を増やすことが必要になります。教え合い学び合う機会を多くすると同時に、数人でグループを作り、村が実現しなければならない課題や解決しなければならない問題に取り組み、課題実現や問題解決のために学習を重ね学び合うという形もあり得ます。そのとき、各地区にある公民館類似施設がそのような学習の場として活用されることが期待されます。



### (3) 村民と行政の協働体制の構築

村民同士の学び合いや協働体制づくりも大事なことです。同時に、村民と行政の協働体制づくりも進めなければならないことです。一例をあげれば、村が抱えている課題、例えば、村の活性化をどうするかとか、村の人口を増やすために何をやったらいいか、といった課題を設定し、それを実現するために必要な資料を集めたり、集めた資料を検討したり、参考になる文献を集め読み合ったり、必要な調査をしたり結果を検討したりして、村民の有志と村の職員が協働して課題の実現に取り組むことがそのまま生涯学習になるということです。これまでは、このような形の生涯学習はほとんど考えられてきませんでした。しかし、地方主権の時代が到来する今だからこそ、このような学習体制を作り上げることが求められているのだといえます。

こうした村民と行政の協働をよりよく行うためには、協働をうまく進めていくための「手引き書（ガイドライン）」を作ることも必要になります。村民が主体となって、役に立つ美浦版「村民協働ガイドライン」を作ることも、生涯学習の一環としてできるようになれば村としては誠に嬉しいことです。

### (4) 村民主導の自主的学習会への財政支援

村民が村の課題の実現や問題の解決などを目的に自主的に行う学習会に対しては、村として財政的に援助することも重要なことであり早急を実現すべきことです。

生涯学習社会を実現しているスウェーデンでは、参加者が必要な経費を自己負担するだけでなく、国および地方自治体が補助金というかたちで財政的な援助を行っています。そうした措置が市民の学習意識を高め、多くの自主的な学習会を実現させることになっているのは間違いありません。

美浦村でも、今後、村民有志や村職員たちに自主的な学習会の開設を促し勧めることにするとしたら、多くの村民が学習会を企画し多くの参加者を動員するため何らかのかたちで資金的援助を実現する必要があります。

### (5) 専門的職員の育成と配置

生涯学習体制作りの最後にあげたいのは、生涯学習に精通した専門的な職員を育て配置することです。これまで、生涯学習は誰でも担当できると考えられてきました。村の職員が学校の教員になり教壇に立つことはありませんが、村の一般職員が生涯学習を担当することはどこでもみられなされていることです。しかし、高齢化が加速し、地域主権の時代が本格化し、村民の協働連携を図り、村民皆んなの社会力を育て、地域の社会関係資本を高め、地域の課題に取り組む学習を実現するという形態の学習を企画実行するといった、これからの生涯学習の重要性を鑑みると、必要になるのは、専門的な知識を備えた専門的職員を育て、配置し、継続的に生涯学習の事業に当たらせることです。

山形県の戸沢村では10年ほどまえから「学社融合主事」という役職を設け、学校教育と社会教育を連結させる仕事を実行してきています。地域のコーディネーターとして、見どころある村民を発掘し、お互い協力し合うよう仲立ちをつとめると同時に、色々と村民が活躍できる場や機会を作ることで、地域における学習や活動を活発化する実をあげています。美浦村でも、生涯学習を活性化させその実りを多くするために、このような専門的職員を育て配置することも重要な施策として考えていく必要があります。



## 8. 生涯学習計画推進の実施期間と具体的内容

では、これから、美浦村ではどのような学習を推進していくか。計画の推進実施期間を平成33（2021）年までの10年として、具体的な学習内容を仕分けし、内容別に整理すると次のようになります。

### （1）生涯学習情報の提供方法の見直しと充実

- ・教育委員会のホームページの開設
- ・生涯学習メニューのメール配信

### （2）教養・文化・健康・福祉等の講座の充実

- ・みほ文化講座
- ・陸平学園
- ・美浦大学
- ・文化祭
- ・自然観察会
- ・映画鑑賞会
- ・パソコン講習会
- ・認知症サポーター養成講座
- ・骨粗しょう症予防教室
- ・読み聞かせ・読み合い講座
- ・ホームヘルパー3級資格取得講座
- ・美浦ゼミナール



### （3）生涯スポーツ・レクリエーション活動の充実

- ・各種スポーツ大会
- ・ふれあいハイキング
- ・いきいき・ふれあい体操教室



### （4）子育て・青少年育成のための講座と活動の充実

- ・ジュニア・アカデミー
- ・ユース・リーダーの育成
- ・親子ふれあいミーティング
- ・少年のつばさ
- ・芸術鑑賞会

(5) 家庭学習講座の充実

- ・いきいきミセス講座
- ・はつらつ家庭塾
- ・親子食育教室
- ・にこにこイクメン講座
- ・ファミリー・サポート・ネットワークづくり

(6) 学校教育支援の充実と機会の増加

- ・学校支援ボランティア育成講座
- ・ノーテレビ・ノーゲーム運動の推進
- ・地域安全パトロールの実施
- ・適応指導教室の充実
- ・中学校での土曜授業及び夜間授業の開設

(7) ボランティア・協働・社会参加の推進・強化

- ・NPO 団体の育成
- ・ボランティア育成講座
- ・村民協働ガイドブックの作成と活用
- ・グリーンツーリズム推進講座
- ・地域おこし指導員養成講座

(8) 文化財の保護・活用・発掘に関わる学習と活動の推進

- ・陸平貝塚の発掘調査
- ・文化財センターの展示会
- ・縄文文化講座
- ・「市民遺跡」の指定と条例化
- ・文化財協力員の育成講習

(9) 地域課題解決のための講座と協働の推進

- ・まちづくり出前講座
- ・花いっぱい運動
- ・地域課題解決講座
- ・ふるさと発見講座
- ・若者むらおこし講座
- ・村民と行政の協働活動
- ・全村公園化運動



## (10) 住民全員参加事業の充実

- ・産業文化フェスティバル
- ・陸平縄文まつり
- ・木原城山まつり
- ・村民体育祭



## 9. 美浦村の生涯学習推進計画の愛称

ーなぜ、美浦村の生涯学習推進計画を「美浦ライネル・プラン」と呼ぶことにするかー

ここまで繰り返し説明してきたように、他にはない、美浦村独自の生涯学習計画であれば、その生涯学習計画を呼ぶ愛称のようなものが欲しくなります。そこで考えたのが「美浦ライネルプラン」です。「ライネル」とは何かといえば、“**Life Need Learning**”すなわち「生きていくために必要だから、人生を豊かにするために必要だから、地域をよくするために必要だから、だから学習するのです。」という意味の英語を新しく作り、その頭文字「**Li-Ne-L**」を採って組み合わせ名づけたのが「ライネル」です。**Life Need Learning** の計画(plan)ですから、「ライネル・プラン」ということになります。

では、なぜ、美浦村の生涯学習を **Life Need Learning** にしたかといえば、これまで使われてきた生涯学習 (**Life-long Learning**)には、「生きている限り(生涯)勉強し続けなければならない」という押し付けがましさが付きまとうイメージがあります。そこで、そのような押し付けがましさを強制的なイメージが伴う **Life-long Learning** ではなく、「自分の毎日の生活を充実させ、自分のこれからの人生を豊かにするために必要だから、よりよい地域や社会を作るために必要だから、だから自分から進んで勉強するのです。」というニュアンスが強い新しい言葉を作り、それを美浦村の生涯学習の特色にし、ついでに愛称にするのがいいというのが生涯学習推進計画策定委員会の提案です。

多くの村民の同意が得られ、親しみと誇りをもって使われるようになることを願うものです。

おわりに

一美浦村の生涯学習をよりよく発展させていくために一

美浦村に限らず、市町村がこれからさらなる発展を遂げるかどうかは、ひとえにそこに住む住民の資質能力がどれだけ高まり、地域の発展にどれだけ力を尽くすかにかかってくるのは、いまさら繰り返すまでもありません。そうであれば、住民が年齢や性別や立場がどうであれ、誰もが、学べる時に、学べるところで、さまざまなやり方で、進んで学ぶという生涯学習がいつそう重要になってきます。人口わずか 700 万人ほどのスウェーデンが生涯学習に力を入れ、生涯学習社会を早々と実現し、国民の資質能力を高め、一人当たりの所得が世界で第 7 位という成果をあげていることから、わが美浦村が学ぶことはきわめて多いものがあります。

ここにまとめた新しい生涯学習推進計画は、美浦村がこれからも発展し続けるためには、村民がどのような意識を持って、どのように学習したらいいか、また行政は住民の学習要求や学習意欲をどう支援し実現させていったらいいか、について議論し策定したものです。こうしてまとめた推進計画ですが、計画案の終わりに、もう一度基本的なことを整理し確認しておくことにします。

まず一つ目は、生涯学習を村のよりよい発展のために学習するという方向に向け舵を切る必要があるということです。美浦村だけのことではありませんが、これまでの生涯学習は、どちらかという余暇時間を楽しむことが主流でした。もちろん、余裕が出た時間を自分のために有効に活用し充実した時間を過ごすことで自分の生きがいを高めることは大事なことです。しかし、財政不足や人口の減少や高齢化の進行など厄介な問題に直面することになるこれからの社会のことを考えると、村の主役は村民なのだ、村の将来を支え作っていくのは私たち住民だと考え、村の発展のために、村を良くするために私もやれることがある、だから私も学習するという村民が一人でも多くなってほしいものですし、実際そういう方向に向けて生涯学習を推進していく必要があります。

2つ目は、行政は、そのように村民の学習意識や学習要求が高まるよう様々な働きかけをすると同時に、村民の学習要求が実現できるよう可能な限りの措置を講じ支援することです。個人として学習することはもちろんできることですが、そのような学習であっても、参考になる図書や資料を購入したり収集するといった支援は行政ができることですし、講座の開設や学習会の開催などは行政が積極的になすべきあるのは言うまでもないことです。そのためにできる限りの支援と援助を行っていかねばなりません。

3つ目は、生涯学習をよりよく推進していくために、村民と行政の協働を具体的に実現していくことです。当たり前と言えばあまりに当たり前のことですが、多くの地域公民館を積極的に活用するために利用規則を変えるなどして、住民の公的施設の利用をできるだけ容易にするとか、学習支援ボランティアの発掘を積極的に行ったり、自発的自主的な学習会や勉強会にも資金的援助の措置を講ずるなど、村を上げて学習を推進して

いくことが益々重要になっています。

このような方向での生涯学習を積極的に進めていくことによって、美浦村が、他市町村に先駆け、“生涯学習の村”として実を上げることを願うものです。

<生涯学習推進計画策定委員会委員名簿>

美浦村校長会（木原小学校長）	会 長	矢 口 孝 夫
美浦村文化協会	会 長	菅 原 貞 季
美浦村子ども会育成連合会	会 長	葉 梨 輝 夫
青少年育成美浦村民会議	幹 事	塚 本 浩 子
美浦村PTA連絡協議会	会 長	飯 田 修 悦
美浦村議会厚生文教常任委員会	委員長	小 泉 輝 忠
美浦村女性行政推進協議会	会 長	遠 井 官 子
美浦村民生委員児童員協議会	会 長	宮 本 秀 夫
美浦村体育協会	会 長	飯 島 隆
美浦村スポーツ少年団	本部長	高 橋 勇
文化財保護審議委員	会 長	堀 越 靖 子
美浦村ボランティア連絡協議会	会 長	市 川 昭 子
美浦村教育委員会	委員長	中 島 賢 一
一般公募		高 松 幸一郎
一般公募		西 木 和 彦
一般公募		野 口 亮 仁
一般公募		佐 藤 十 枝

<関連資料および参考文献リストーさらなる学習のためにー>

1. 波多野完治 『生涯教育論』 1972年 小学館
2. 久田邦明 『生涯学習論』 2010年 現代書館
3. 門脇厚司 『社会力を育てる』 2010年 岩波新書
4. 白鷹町 『白鷹町生涯学習振興計画』 2007年 白鷹町教育委員会
5. つくば市 『市民協働ガイドライン』 2009年 つくば市市民生活部